

第五福竜丸

—— 映画文学人生論

監督：新藤兼人(1959年) 脚本：八木保太郎 新藤兼人
出演：久保山愛吉 宇野重吉 撮影：植松永吉 武井大
久保山しず 乙羽信子 音楽：林光
漁芳長 稲葉義夫 参考：大石又七
静岡県知事 小沢栄太郎 『死の灰を背負って』
助役 殿山泰司 (新潮社 1991年)

原水爆の被害者はわたしを最後にして
ほしい——久保山愛吉

新藤兼人監督の『第五福竜丸』は現実に起こった事件に基づいてつくられた映画である。

焼津の遠洋マグロ漁船第五福竜丸は、昭和二十九年三月一日、マーシャル群島の北端、ビキニ環礁から約百六十キロ離れた漁場で操業中、米国の水爆実験による死の灰をあびた。二十三人の乗組員は全員、その後遺症に苦しみ、久保山愛吉通信長は、「原水爆の被害者はわたしを最後にしてほしい」と言い残して、同年九月に亡くなった。

映画では主役の久保山夫妻を演じるのは宇野重吉と乙羽信子。やはり新藤兼人監督の映画『愛妻物語』のコンビで、夫婦愛をベースにして死の灰への恐怖を訴えかけている。

その他の乗組員は映画では目立たないが、やはり核実験の被害者であることには変わりない。二十三人のうち二〇〇三年までの死者は半数以上の十二人、平均死亡年齢は約五十五歳で、日本人男性の平均年齢七十九歳と比べるとかなり低い。

見舞金をいくらか貰ったにせよ、雀の涙。その後の彼等の人生は原爆病と闘いながら、さぞ苦難にみちたものだっただろうと想像される。

生存している福竜丸の乗組員の多くは事件について黙して語らず、マスコミの取材を避けているようにみえる。ものいえば唇寒し。下手なことをいうと、どこからか石が飛んでくる。



第五福竜丸

映画文学人生論

しかし、現実には久保山さんの他にも二十二名それぞれのドラマがある。彼等は東京の病院に入院しているとき、衝撃的なテレビ番組を観た。アナウンサーが若い娘に向け、「第五福竜丸の乗組員から、もし結婚してくれと言われたらどうします」と聞くと、「ええっ、あんな人たちと結婚、とんでもない」と娘は答えた。

沈黙がちな二十二名の乗組員の中で、積極的な発言を続けているのは大石又七で、『死の灰を背負って』などの著書もある。それを読みながら私はまぼろしのドキュメンタリーの筋を想像した。

事件当時、大石は冷凍係だった。二十歳の若さとはいえ、カツオマグロ漁業では六年の経歴をつんだベテランだ。家庭の事情で中学校も卒業していないが、勉強して資格をとり、将来は船長になるつもりでいた。やむなくその夢をあきらめ、東京に出て、クリーニング屋になる。仕事はとりあえず順調で、結婚してくれる相手も見つかった。

しかし、第一子は死産。ショックだったが、幸いその後、女の子と男の子が無事に生まれた。

それまでは彼も沈黙していたが、一九六八年、はやぶさ丸と船名を変えた元第五福竜丸が東京の夢の島で廃棄されているという報道に接してからその保存と核反対のために発言しはじめた。

第五福竜丸事件はまだ終わってはいない。

死の灰を背負って泳ぐクロマグロ